

「よみがえる竹迫座」興行記

川平 敏文（日本近世文学）

平成19年6月30日（土）、合志市総合センター・ヴィーブルにおいて、「熊本県立大学公開講座・合志市文化芸術自主事業として、「よみがえる竹迫座」が開催された。この催しは、合志歴史資料館に所蔵される^{ぎかくぶんこ}蟻鶴文庫の存在を広く知ってもらい、その歴史的背景や今後の保存の問題についても考えてゆくために企画したものである。

合志の地には、江戸時代のはじめ頃から、^{たかばざ}竹迫座と名乗る地芝居の一座が存在し、歌舞伎を公演していた。竹迫座は明治初頭まで続いたと見られるが、その末期の^{かなざわぎかく}三味線奏者として活躍していたのが初代・金澤蟻鶴で、蟻鶴文庫とは、彼とその子息（二代目蟻鶴）が集めた、浄瑠璃本を中心とする約700点の和装本を指す。残念ながら保存状態はさほど良好とはいえないが、地方でこれだけの分量の浄瑠璃本が伝存している例は稀であろうと思われる。以下、どのような経緯で本企画が動き出したのかを、簡単に記しておくことにする。

今から遡ること7年前、当時学部4年生に進級したばかりで、卒業論文のテーマ探しを始めていた岡村綾子氏は、当時の合志町総合センターの倉庫の一角に、本資料群が段ボール数十箱に分けて「眠っている」ことに目を付けた。そこで当方は岡村氏に、本資料群の整理（目録作り）を基礎作業として、「熊本と文楽」というようなテーマで卒業論文を執筆するよう指導したのであったが、以後、氏はほとんど丸一年を費やして目録を作り上げ、卒業論文の附録とした。本資料群が、旧蔵者の名前にちなんで「蟻鶴文庫」と名付けられ、一冊一冊に番号が附与されて整理整頓されたのはこの時である。

さて、上記目録は、その後当方が若干の補足・訂正を行って、平成15年に『菊池郡合志町歴史資料館所蔵 蟻鶴文庫目録』（合志町教育委員会）なる報告書としてまとめたのであったが、これが浄瑠璃や文楽を専門とする研究者の目にも留まり、東京や大阪から実際に本文庫を閲覧にみえる方も出始めた。その中の一人が、今回ご講演を依頼した国立文楽劇場の土居郁雄氏であり、本企画は氏との談

話の中で芽吹いたものであった。

本企画は当初、本学の「公開講座」の予算枠で、上記の土居氏と、熊本の地方芸能史に詳しい熊本大学の安田宗生氏をお呼びして、文楽や竹迫座の話をして頂くという程度のものであった。しかし「芸能」であるからには、やはり実物を見るに如くはない。もちろん竹迫座そのものは消滅してしまっているが、幸い熊本県には清和文楽という、全国に名高い地方文楽が活動している。そこで上記の講演に併せて、この清和文楽の出張公演も合わせて楽しんでもらいたいと考えた。とは言うものの、予算的には当然本学の「公開講座」枠では無理である。そこでこの企画を合志市生涯学習課に持ち込み、「合志市文化芸術自主事業」との協同開催という形で、実現に漕ぎ着けたのである。

当日講師として出講して下さった二人の先生、出張公演について最大限の便宜を図って下さった清和文楽館の渡辺久館長、そして合志市側の窓口として当方と共に企画・調整に携わって下さった合志歴史資料館の齋藤富士男館長には、この場を借りて改めて御礼申し上げます。

なお当日は413名の御来場を得たが、その中には日本語日本文学科の1年生42名、同2年生以上（大学院生含む）50名の学生が含まれる。1年生は、毎年本学科が行っているフィールド・ワークの一環として、本イベントへの参加をそのプログラムの中に組み込んだものであり、2年生以上は、「日本近世文学史Ⅰ」ほか当方が担当している授業科目の受講者が中心である。これだけ多くの学生が参加できたのは、本年度から始まった学部長特別裁量費によって、貸切バス1台分（2年生以上の学生用）の費用、そして参加学生全員の入場料の半額を補助して頂いたことが大きかった。こちらでも記して感謝申し上げます。

* * *

以下に、当日のプログラムを掲げ、続いてその概要と、参加学生による文楽公演の感想を摘録する。

<プログラム>

◇第一部 文楽を知る

総合司会 川平敏文

「文楽の歴史と魅力」 国立文楽劇場 土居郁雄氏

「竹迫座と熊本の芸能」 熊本大学教授 安田宗生氏

◇第二部 文楽を見る

「傾城阿波の鳴門」八段目 清和文楽館
～文楽体験コーナー

◇企画展示

「竹迫座と蟻鶴文庫の世界」(6月23日～8月5日)



<概要>



第一部では、まず国立文楽劇場の土居郁雄氏による「文楽の歴史と魅力」と題する講演が行われた。講演では、近松門左衛門・竹本義太夫の話を中心に、操り人形芝居の歴史、太夫や三味線の「間」の魅力など、浄瑠璃・文楽の基本的な知識が話された。



続いて、熊本大学の安田宗生教授による「竹迫座と熊本の芸能」と題する講演が行われた。講演では、近代熊本の芸能状況が豊富なデータをもとに展望され、竹迫座の活動実態についての仮説が述べられた。



二人の講師の講演終了後、会場との質疑応答が行われた。会場からは、竹迫座と金澤蟻鶴とがどれくらい結びつくものであるのか、人形の衣裳は江戸時代当時の流行が反映しているのかなど、盛んな質問があった。



第二部では、清和文楽保存会による文楽の実演が行われた。タイトルは「傾城阿波の鳴門」。わけあって捕り手に追われる身の女が、幼い時に置き去りにした一人娘に偶然再会する場面には、会場から啜り泣きの声も聞こえた。



その他、企画展示として、付設される合志歴史資料館で、「竹迫座と蟻鶴文庫の世界」と題する展示会を行った。30点ほどの書籍を選び、熊本県立大学文学部の学生が手分けしてその解説を執筆した。

<文楽鑑賞後の学生の感想>

今回初めて文楽を見たのですが、想像以上に感動するものがありました。事前にあらすじ、見せ場などを知っていたこともあり、物語に入りやすく、最初から最後まで見入っていました。

特に、お弓とお鶴母子の会話場面と、お鶴が死んでしまったことを知り泣き叫ぶ場面は心に残りました。お鶴が自分の娘であり、健気に自分達を慕い探し続けたことを知り、母と名乗ってすぐにもお鶴を抱きしめたいという想いと、愛する娘であるからこそ、お尋ね者である自分達から遠ざけて、危険な目にあわせてはいけないという想いの狭間で揺れ動くお弓の心が、太夫の語り口調や声の強弱、三味線の力強い音色、舞台を駆け回る人形によって鮮明に表現されていて、心に響きました。

そして、やはりお鶴を連れ戻そうと出ていったものの、お鶴を見つけられず家へ帰ってきたお弓が、夫の十郎兵衛からお鶴の死を告げられ、我が子を失った悲しみと、自分が引き止めていればお鶴は死なずにすんだのにという後悔の念にさいなまれる所でも、お弓の切なく苦しい母の想いがひしひしと伝わってきました。

十郎兵衛がお鶴を殺してしまった時、「実の娘であることを知らないとはいえ、お金の為に娘を死なせてしまうなんて、十郎兵衛はなんてひどい人なんだ」と思っていました。よく考えてみれば、十郎兵衛はもとはそんなことをする人物ではなく、彼をこうさせてしまったのは、時世と貧しさ、武士という身分に生まれてしまった運命であると思いました。

講演が終わった後、お弓とお鶴の人形を見せてもらいました。近くで見ると、とても細かく作られていることがよく分かりました。髪は人毛で、指の関節一つひとつまで仕掛けが施されていたことに驚き、この人形がどうして人の繊細な心を表現できるのかが少し理解できたような気がしました。

文楽が熊本に伝統芸能として残っていることを誇りに感じました。この人の心を表現し、人の心に訴える素晴らしい文楽を、後世に伝えていかなければならないと思いました。

(日本語日本文学科二年 坂下智美)

文楽を見るのははじめてだったが、鑑賞した「巡礼歌の段」は、事前に配られたプリントで内容が分かっていた。そのため、退屈するのではないか……と考えてしていたが、まったく不要な心配だった。むしろ上演の数十分がとても短く感じられたくらいだ。

先にあった講演で聞いた通り、3人の人形遣いは特に姿を隠すこともなく、堂々と舞台上を移動する。黒衣の「黒」は「無」を意味するという約束事があり、そこにはいないものであると見なすのだという。けれどその知識を得ていなかったとしても、暫く見ていれば本当にそこには誰もいないような感覚に陥っただろう。3人もの人形遣いが、殆ど背景と同化してしまう。人形の一挙一動に注目してしまい、知らず意識から外れるのだ。そのぐらい、人形の動きはリアルで、「生きているようだ」とはこういうことを言うのだろうかと感じた。

義太夫についても随分驚かされた。一人の人間がすべて語っているとは思えないほど、人物によって語調が変化しているのだ。また地の語りの部分にも何ともいえない情感が籠っていて、すべてを聞き取ることができなくても場面の移り変わりが容易に想像できるようだった。さらにそこに三味線が加わることで、人物の心情が音となって直接耳に響く。特にお鶴が巡礼の辛さを語るシーン、お弓がそれを突き放すシーンは、そう長い台詞ではないのに、気道が詰まるような哀傷

を感じた。泣き崩れるような人形の動き、太夫の苦しげな声に、三味線の響きの、名状しがたいような感傷が、互いに相まって素晴らしい効果を生んでいたと思う。講演で言われていた「文楽は、太夫・人形遣い・三味線がそれぞれ別なことをしてはじめて成る芸能である」とはこういうことなのだろう。どれか一つでも技術が欠けていれば物足りず、こんなにも人を感動させることはないに違いない。

「勉強」の一環で鑑賞した今回の公演であったが、それ以上に心から楽しむことができた。同じ地域に根深く伝わるこの演芸を、機会があれば是非また体験したいと思った。

(日本語日本文学科二年 坂口亜耶)

「傾城阿波の鳴門」は、近松門左衛門の浄瑠璃「夕霧阿波の鳴門」を改作したものである。今回見たのはとくに、今でも上演される八段目の「巡礼歌の段」だった。実際に浄瑠璃を見たのは初めてだったので退屈にならないか心配だったが、本当に面白くて驚いた。渡されていたあらすじはあらかじめ読んでいたが、実際に見たのとは印象が全く違った。

まず、太夫の語りが印象的だった。子供の声、女性の声、男性の声、全てをそれらしく語り分けていたのでとても感情移入しやすかった。三味線の伴奏も繊細且つ鋭い感じがして世界観にあったものだと思う。先の講義を思い出して、この三味線の音が琵琶だったら、全く違う印象だろうとも思った。しかし、たった一つの楽器でここまで雰囲気を出せるのが驚きだった。

また、人形も本当に生きていたかのように見える。個人的には次のような印象を持った。お弓の人形は手先や顔の微妙な動きに女性らしさが出ていた。また、お鶴が実の子供だと分かったときの反応が実に母親らしかった。お鶴の人形は、仕草が本当に人間の女の子のようにかわいらしかった。十郎兵衛の人形はお弓、お鶴の人形に比べ、体の仕草が大振りで大袈裟だったと思う。荒々しくて、力強い感じを受けた。最後に出てきた捕り物衆は主要人物の人形に比べると大雑把なつくりで大きさもかなり小さかった。これは主要人物との差異化を図るためなのであろうかと思った。公演後、人形の説明があり、それによると、主要人物(お弓、お鶴など)の人形は3人がかりで動かしているそうである。頭、右手を動かす主使い、左手を動かす左使い、足を動かす足使いの3人が各々のパーツを動かす。いきがぴったり合っていないと人形を生きていたように見せられないそ

うだ。このように大勢で一体の人形を動かすという形態の人形劇はあまり世界にも類を見ないように思う。

また内容についても、あらすじを読んだ時には少し荒唐無稽なストーリーだと思ったが、全編を通して実際に見ると、話に実感が持てた。お鶴の「母がいてくれたら、髪を結うてくれるだろうと思うと悲しくて」や、お弓の「ああ、離れがたい」などの台詞やシーンが印象に残っている。「今の人でもこういう立場にあつたらこういう風に行動しそうだなあ」と納得できた。お弓が偶然訪ねてきた巡礼の女の子が自分の娘だと知り、喜びに震えたり、害が及ばないようにと追い出そうとする場面ではすすり泣いている人もいた。十郎兵衛は金欲しさに誤ってお鶴を殺してしまうが、ここでこういう展開を持ってくるのも面白いと感じる。少し、シェークスピアの劇を彷彿とさせた。最後にお弓がお鶴の死骸に火を放ち念仏を唱える場面で、今回は舞台が真っ赤なライトで照らされていたが、当時はどのような演出がされていたのかが気になった。

現在ではこの八段のみが上演されるという「傾城阿波の鳴門」だが、それは母と子の純粋な愛情が人々の心に訴えかけるものがあつたのだろうと思う。人形浄瑠璃をじっくり見たのははじめてだった。現在の我々でも同じように面白く感じる事が出来るということが素晴らしいと感じた。

(日本語日本文学科二年 宮崎由子)